

令和 2 年 № 72
夏おぼん号

あきばさん

発行人 / 発行所
秋葉山 新井 寺
272-0144
千葉県市川市新井
1 丁目 9 の 1
電話 047-357-8319
FAX 047-357-8399
mail: info@shinseiji.jp
http://www.shinseiji.jp
郵便振替 00150-2-282968

お盆と新型コロナウイルスと

九州豪雨災害 当山住持

「盆と正月」といわれる日本人にとつての国民年中行事の一つ「お盆」の到来です。お盆を迎えると、私共 日本人は、自分たちが「今」生かされていることに感謝し、ご先祖さまにこの上ない孝順心をもつて報恩行に親しみ、励みます。

お盆の由来は、皆様もご存じの通り、お釈迦さまの十大弟子の一人 目連尊者さまが、不思議な神通力をもつて今は亡きご先祖さま（お母さん）の来世をご覧になりますと、お母さんはやせ衰え、餓鬼道で苦しんでいました。お釈迦さまにご指南を仰ぎ、多くの諸仏衆僧に百味の飲食（ひやくみのおんじきこの上ないごちそう）を供養して、さらにお母さんの追善供養をつとめたところ、お母さんは餓鬼道から救われたと経典に伝えられています。

目連尊者さまのお母さんへの孝順心が感謝報恩のご供養の意義として今も継承

され、お盆の行事やお施餓鬼の大法要となつていきます。このように、日本のお盆は、古来より嫡々相承、継承されてきた有難い伝統的な仏教行事です。

ご先祖さまは私共の心の中で常に生きて、心の安らぎ、よりどころ、お守りとして、私共を導いてくださっています。ですから、私共も「生きたご先祖さま」としてまごころからなるご供養を、おも

てなしを心がけなければなりません。私共はこの功德、おかげをいただき日常生活を心豊かに平和に生かされています。本年は新型コロナウイルス感染症の流行が続く、盆月に入ってもなお日本全国のみならず、全世界までもが苦悩のどん

底に追い込まれています。さらに、今月四日未明には、梅雨前線の影響を受けて九州地方各地では豪雨となり、河川の氾濫や洪水、土砂崩れが続出しました。特に熊本県では気象庁観測以来の大豪雨に襲われ、多くの尊い生命が奪われ、家屋、河川、道路など大災害に見舞われました。心よりお悔やみとお見舞いを申しあげ、一日も早い復興回復をご祈念いたします。年に一度のご先祖さまをお迎えしての大切な「お盆」にちなみ、お釈迦さまからの正しい信仰心、そして、ご先祖さまのおもいを日常生活にかされまして、その功德をうけ強い精神力のもと、健康第一にお互いに助け合い、心豊かに平和な人生に向かってご精進ください。合掌



『正法眼蔵』「洗淨」の巻に学ぶ 「手洗い」の教え



六月十九日、都道府県をまたいで移動自粛要請が全面解除され、人びとの活動が本格的に再開しました。人びとの活動が再開されれば、第二波・第三波の襲来は想像に難くなく、毎夕発表される東京都の感染者数は百名を超える日が続いています。わたしたちは、コロナウイルスとともに暮らしていかねければならない現実にあることを再認識しています。その生活において、マスクは必需品となり、感染予防のためのうがいや手洗いなどはよりていねいに行なわれることが求められます。

大本山永平寺を開かれた道元禅師の著書『正法眼蔵』に、「洗淨」巻というお示しがあります。この巻には、お手洗いのあとの「手洗い」について、じつに、ねんごろに書かれています。

「徹底した手洗い」がせつに求められるこんにち、道元禅師の「手洗い」の教えを学んでみたいと思います。

◇『正法眼蔵』「洗淨」について

『正法眼蔵』「洗淨」巻は、「延応元（一二三九）年十月二十三日」のお示しとあります。鎌倉時代のことです。当時を考えると、水洗のお手洗いではなく、水道も蛇口をひねれば水が出るような環境ではなかったことでしょう。

「洗淨」巻には、お手洗いの作法についても、こと細かく示されています。お手洗いののち、「簍」とよばれるへらや紙を使い、さらに小さな手桶に水を汲んで自らの左手で洗っていたようです。その使った左手を洗うために、念入な手洗いの方が書かれています。

◇せつけんの代わりに

「手を洗う」といつても、せつけんもハンドソープもない時代、代わりに使われていたものは「灰」や「土」、「さい

かち（皂莢）」とよばれるものでした。さいかちとは、マメ科の植物を粉にしたもので、サポニンが含まれています。サポニンは、水に溶けると石けんのよう泡立ち汚れを落とすはたらきがあることから「天然の界面活性剤」ともいわれています。

土や泥で手を洗うということは、現代のわたしたちには、考えられないことかもしれませんが、七世紀のインドでは行なわれていた作法のようです。

◇七度洗う そして・・・

灰三、土三、皂莢一なり、あはせて一七度とせり。

「一度の手洗いに、灰で三度、土で三度、さいかちで一度、あわせて七度洗うこととする」と書かれています。

● 灰三（灰を用いて三度）

右手で灰をさじですくって瓦や石のデコボコ（ザラザラ）しているところにおき、そこに少しづつ水をしたたらせるようにして左手を洗います。このとき、瓦や石に左手をあてて、こそげとるよう洗うとあります。繰り返すこと三度。

● 土三（土を用いて三度）

つぎに、瓦の上に黄土色の「土だんご」をおいて、水をたらしてだんごを泥にしなから、左手を洗うこと、三度。

● 皂莢一（さいかちを用いて一度）

さらに、右手でさいかちをとって小さな桶に水を入れて溶かし、その中で両手をこすりあわせて洗います。このとき、腕にいたるまで、よくよく洗いなさいと書かれています。

このあと、大きめの桶に水かお湯をいれて両手を洗い、さらに、その水を小さな桶にうつして、新しい水を加えて両手を洗うとあります。

手を洗ったあとは、公共、あるいは自分のてぬぐいで手を拭き、衣（直綴）を着ます。そして、「塗香す」とあります。塗香とは、幅二〜三センチくらい、長さ十センチくらいのビンのかたちをかたどった香木のことです。両端に穴が開けられて細い紐が通してあり、お手洗いに入るために脱いだ衣をかけておく竿にかけてあるようです。その香木を両手でこすりあわせて、両手に薫じるといいます。

こうして、ようやくにして十回の手洗いを了えるのです。

◇ 手洗いの留意点

きわめて ていねいに

この手洗いの方法に、「滴水を点じて」とか「水を点じて」とあります。水を使うときには、ジャブジャブ使うのではなく、したたらせるように使う。すなわち、けつして お水一滴もむだにしてはなりませんよ、というお示しがこめられているといえましょう。

そのほかにも、水を汲む柄杓をとるときには、**かならず右手**を使うこと。桶や柄杓の音をやかましくたてないように、**静か**に行なうこと。水やさいかちが周囲に飛び散らないように、手洗い場のまわりをぬらさないように。そして、「およそ倉率なることなかれ、狼藉なることなかれ（あわただしく乱暴に行なつてはなりません）」と書かれています。さらには、「誠心に住して、慇懃にあらふべし（まごころをもつて、ていねいに洗いなさい）」とも、おっしゃっています。

◇ 念入りな手洗いの理由

新型コロナウイルス感染症が流行する前は、手洗いについて、パパツと済ませてしまえばよいと考えていた人も少なくなかったかもしれせん。そういうわたしたちを見透かしていたかのようには、道元禅師は「**きわめてていねいに**」と繰り返してお示しになっています。

なぜ、道元禅師がこれほどまでに徹底した手洗いについてお示しになったのかは、今後の参究にゆずりたいと思います。ですが、「手洗い」ということを新たな視点で考えるよい機会となりました。毎日、幾度となく手を洗うたびに、「**すべからくていねいなるべし**」という教えをたいせつにしたいと思えます。

◎ おもな参考文献

● 大本山永平寺

『本山版訂補 正法眼蔵』

● 宮川敬之 特別寄稿

『正法眼蔵』「洗淨」「洗面」巻購読（上）

― コロナ・パンデミック下で読む ―

大本山永平寺『傘松』九二二号

（令和二年六月号）所収

（副住職しるす）



おはなのおはなし ハワイアン精神とオハナ



ハワイアン精神とオハナハワイのオリ(詠唱)に「アロハチャント」というものがあります。アロハチャントは、「アロハ (ALOHA)」の意味を説明するオリで、ハワイアン精神が詠われています。どの国においても、花は文化や信仰を彩ります。ハワイではポリネシアの人々がレイやフラ(フラダンス)など、独自の文化を作ったといわれています。彼らは自然を崇拜し、共存することを大切にしていました。現在でもレイは、フラの装飾品や感謝や敬愛の気持ちを込めたプレゼントに用いられています。また、ご葬儀の際のレイには香り高いプルメリアが使われることが多いです。プルメリアはどこにでもあり、簡単に調達することができるので、お墓にもお供え

されるようです。ちなみに、ハワイには仏様のための特別なお花はなく、ハワイアンなお花がお供えされます。副住職が以前お世話になったハワイのお寺の仏様には、大小様々のアンズリウムがお供えされていたのが印象的でした。ハワイ語で家族を「オハナ」といいます。ハワイには、自分の周りにいる全ての人を自分の大切な家族のように接するといふ考えがあります。先日、わたしの掌ほどの大きさのアンズリウムを市場で見かけました。ハワイの文化(ハワイアン精神やオハナの考え)を知ってから、ハワイの代名詞ともいわれる大きなアンズリウムを見ると、ハワイがより身近に感じられました。(花屋 秋葉山しるす)

「アロハチャント」

Akahai e na Hawai'i

ハワイの人々よ、思いやりを持ちましょう

Lokahi a kulike

助け合うとハーモニーが生まれます

'Olu'olu ka mana'o

いつも明るい方に思いを向けて

Ha'aha'a kou kulana

どんな状況でも謙虚さを忘れないで

Ahonui a lanakila

それらを忍耐強く続けると

生命は光に満ち溢れます



編集後記

方丈さんは、「わざわざみなさんにお伝えすることでもない」と言っていました。が、昨秋、方丈さんは、曹洞宗より、任職勤続四〇周年の表彰を受けました。

「よくここまでできたなあ。おかげさまだ」というのが、方丈さんの口ぐせです。このひと言には、語りつくせない四〇年間のさまざまなおもいがぎっしりと詰まっているように聞こえます。

人生はたった「今」しかない。世のため、人のため、家族・自分自身のために、努力と精進の、感謝と報恩の毎日を、今、ここにつとめていくこと。

方丈さんが、折にふれて、檀信徒のみなさまにお話ししていることです。おそらく、四〇年間、自らもそのような生き方に精進してきたのだらうと思います。「感謝報恩」というのは、方丈さんのモットーなのだと思います。

その四〇年間に、敬意と感謝と慰労のおもいはあふれますが、「これからは、ゆっくり休んでください」とは言いません。これからも、からだに気をつけて、つねにバイタリティーあふれる方丈さんにしかできない生き方で、生涯現役にわたしたちを導いていただきたいと願っています。

何かと不安な毎日ですが、みなさま、くれぐれもご自愛くださいませ。